

形を見つめる

2025年

7月15日(火)～
10月5日(日)

展示目録

都合により展示の内容を一部変更することがあります。作品目録のNoは作品の並びと異なります。

No	作品名	年号	和暦	年齢	サイズ	号	材質
1	自画像	1925	大正14	20	30.5×22.0	3F	油彩・キャンバス
2	静物	1942	昭和17	37	52.7×45.0	10F	油彩・キャンバス
3	室内	1942	昭和17	37	91.0×73.0	30F	油彩・キャンバス
4	室内Ⅱ	1940年代前半			80.5×99.8	40F	油彩・キャンバス
5	アンダーソンの壺と小鳥	1951	昭和26	46	90.9×72.7	30F	油彩・キャンバス
6	花と魚	1952	昭和27	47	65.1×90.9	30P	油彩・キャンバス
7	花	1952	昭和27	47	52.5×45.0	10F	油彩・キャンバス
8	盾を持った武士	1956	昭和31	51	130.4×97.1	60F	油彩・キャンバス
9	静物	1958	昭和33	53	65.0×80.5	25F	油彩・キャンバス
10	二つの像	1959	昭和34	54	80.3×130.3	60M	油彩・キャンバス
11	火の山にて飛ぶ鳥(軽井沢山荘にて)	1960	昭和35	55	72.7×60.6	30F	油彩・キャンバス
12	太陽讃歌(山はくれない)	1969	昭和44	64	90.0×72.0	30F	油彩・キャンバス
13	小運河の家(1)	1972	昭和47	67	100.0×81.0	40F	油彩・キャンバス
14	スペインの白い町	1972	昭和47	67	72.5×60.0	20F	油彩・キャンバス
15	雲と海の対話(嵐)	1975	昭和50	70	162.1×130.3	100F	油彩・キャンバス
16	ブルゴーニュのブドー畑	1979	昭和54	74	80.3×100.0	40F	油彩・キャンバス
17	作品Ⅰ	1985	昭和60	80	65.0×100.0	40M	油彩・キャンバス
18	坂の上へ(アンダルシア)	1987	昭和62	82	92.0×73.0	30F	油彩・キャンバス
19	作品Ⅱ	1988	昭和63	83	72.6×91.7	30F	油彩・キャンバス
20	城のある町	1988	昭和63	83	120.0×120.0	50S	油彩・キャンバス
21	花(ヴェロンにて)	1988	昭和63	83	55.0×46.0	10F	油彩・キャンバス
22	花(ヴェロンにて)	1989	平成元	84	60.0×92.0	30M	油彩・キャンバス
23	作品Ⅱ	1991	平成3	86	116.7×90.9	50F	油彩・キャンバス
24	作品Ⅲ	1991	平成3	86	110.0×110	60S	油彩・キャンバス
25	花	1950年代後半			19.0×78.0		陶板
26	「女人短歌」表紙絵原画 創刊号	1949	昭和24	44	27.3×19.0		油彩・紙
27	「女人短歌」表紙絵原画 74～77号	1967～68	昭和42～43年		26.4×15.7		鉛筆・紙
28	宇野三吾《青い籠》				26.0×25.0×9.0		陶器

形を見つめる

作品に登場するさまざまなモチーフを、節子はどう描き出してきたのでしょうか。

その独特な“形”を見つめます。

形を追求する

「アトリエの隅にいつも埃を浴びて転がってゐる壺、皿、籠、花瓶に挿してある枯れた花、果物、柿、林檎、葡萄、そしていくばくかの布きれ。毎日わたくしはこれを描きます。(略)形の追求。ヴォリュームの把握。立体への執心。造型への探求。(略)壺も皿も籠の中の果実も、みんなことごとく形やヴォリュームや色彩となつて消化され、口中にし腹中に呑み下して、一つの面も、一つの線も、自由自在、自家葉籠中にしなくては駄目なのです。」*1

モチーフの形や色などをつかみ取って自分の中に落とし込んでいき、自分なりの表現でキャンバスに描き出すことが重要だと考えていた節子は、モチーフを写実的に描くのではなく、あえて形をデフォルメしたり実際とは異なる色を配置させたりすることもありました。

こうした節子のモチーフへ向き合う姿勢は、のちに造形性を強く意識した静物画を生みだすことに繋がっていきます。《花と魚》(No.6)は、ザルの網目や魚を模様のように幾何学的に表現し、花瓶の輪郭線を大胆に黒く太く強調させて描くことで、花卉と花瓶の乳白色がより際立っています。節子の創造力によって形作られたモチーフは、まわりの影・背景・机などと組み合わせられて、画面を形成する構成要素のひとつとなっていました。こうした造形性の高さが評価され、節子は日本を代表する画家として活躍していきます。



1950年代前半の三岸節子

古代美術の形

《アンダーソンの壺と小鳥》(No.5)にも描かれている大きな壺は、中国先史時代の彩文土器でふっくらと丸みのある均整の取れた美しい形をしており、上部の太い線で描かれた独特な模様も特徴的です。節子は本作について、以下のように語っています。

「色彩もきわめて節約して、アンダーソンのもつ古代の雰囲気と、小鳥の優しい世界の融合をはかったともいえるでしょうか。サッと渋滞なく最短距離に出来上ってしまった絵で、思考と逆に、画面の中で割り切れてしまった形が、作者にとっては迫力を欠き不思議さを失ってしまった感があります。何千年も支那奥地、新疆省の砂漠の地中に眠っていた素焼の壺は、まだまだ私をひきつけております。」*2

節子はモチーフがもつ魅力的な形を意識しながら、黒や褐色を基調に限られた色数で表現し、鳥籠と壺の奥に窓を描くことで、絵画のなかの世界がより広がるように見せています。

1954年の初渡欧からの帰国後、古代美術に傾倒していたころに多く描いていたのは埴輪や素焼きの壺でした。《盾を持った武士》(No.8)における輝く太陽を背景に堂々と立つ埴輪は、太陽の光と呼応するような模様がある盾を携えており、引っかけ線で埴輪の乾いた素朴な質感を表現しています。本作のほかにも、節子は人や鳥などの形をした埴輪をモチーフとした作品を描いており、古代の人々が生み出した素朴な美しさや力強さを作品に取り入れようとした。

同時代の芸術家から

節子と親交のあった芸術家たちが手がけた作品が絵のモチーフとなることもありました。《静物》(No.2)には、陶芸家・宇野三吾(1902-1988)が手がけた《青い籠》(No.28)が、画面奥に登場しています。ペルシャ陶器の青磁に着想を得たという鮮やかな青色と、編み込むように形作られた曲線が特徴的な作品です。

また、《二つの像》(No.10)は、ガラス作品がモチーフになっています。展覧会を併催したり互いに作品を送りあったりする*3など特に親交が深かったガラス工芸家・淡島雅吉(1913-1979)が、「《二つの像》は昨年頂きました二つのガラスがヒントとなって出来ました」*4という手紙を節子から受け取ったと語っており、当館の土蔵展示室にある《オブジェ》ともよく似た形をしています。描かれたそれぞれの形は、背景のシャープな色面構成の中で薄塗りと緻密な引っかけ線によって表現され、渋めの色調でまとめられています。

学芸員 丹野 汀

*1 「静物画家の独白」『花より花らしく』求龍堂、1977年、14・15頁

*2 『日本現代画家選Ⅱ8 S.MIGISHI』美術出版社、1954年

*3 『近代ガラスデザインの先駆者 淡島雅吉』町田市立博物館、2019年、7・8頁

*4 『芸術新潮』1970年1月号、98頁